

暦の上では、春になりましたね。みなさん元気にお過ごしでしょうか。

さて、今回のテーマは・・・

『子ども同士の喧嘩』について、一緒に考えていきたいと思います。

## 子どもがすぐ喧嘩になるわけ



発達障害・グレーゾーンの子もたちは、一人一人の脳の特性によって喧嘩が起きやすいと考えられます。特に衝動性が強い特性があると、行動や感情をコントロールすることが苦手です。

それ以外には、  
・気持ちを切り替えることが苦手  
・「こうあるべき」というこだわりがある  
・人の気持ちを考えることが苦手

など、このような状況や物事が自分の思うようになっていないことにイライラしやすいんです。そして、このイライラする感情を自分でコントロールする力（理性）が、脳でまだ発達途中なんですね。自分の思うようにならないストレスでイライラしているところに、お友だちがちょっとでも気に入らないことをすると、イライラの感情がわいてきて暴言や暴力となって表れます。まだまだ理性が発達途中の子も同士では、お互いにイライラの感情をコントロールすることができずに喧嘩が始まるというわけです。「怒りっぽい」特性がある、まだまだ発達途中なんだと考えたら、子ども同士の喧嘩への見方が変わってきませんか？  
イライラの感情をコントロールして、周りとの折り合いをつけることを学べる機会が、喧嘩なのです。

## 喧嘩で社会性を身に付ける大人の対応について

### ◆様子を見守る場合

危険がなければ様子を見てあげてください。

子ども同士でいろんなやりとりをしているうちに、いつの間にか笑っていたり、逆にエスカレートしたりするかもしれません。喧嘩の中で、どんなことを言ったら、どんな態度をしたら、相手が怒ったり、泣いたりするか、ということを経験します。

発達途中の子もたちは、このような体験の中から感情を学んでいきます。

子ども同士の喧嘩を仲裁してしまうと、せっかくのチャンスを逃してしまうことになってしまいます。

そして、自分たちで喧嘩を収められたり、どちらかが好ましい行動、例えばその場から自分で離れたり、違うことをし始めたら『〇〇してるんだね』と見たまま肯定してみたり、『〇〇しょっか』と違う行動に誘ってみたりもいいですよ。

### ◆仲裁に入ったほうがいい場合

危険そうだなと思う場合。

また、例えばAくんがBちゃんを叩いたと喧嘩になっている場合。

叩かれたほうのBちゃんは「Aくんが叩いた」など、あれシタ、これシタと言ってくるときもありますよね。

そんなときには、いったん手を止めて言ってきたことをそのまま言い返すことをこころがけて、「叩かれたんだね」「〇〇されたんだね」など同じ言葉で言い返してあげてください。

言い方としては、子どもの目線に降りて気持ちを理解してあげる感じです。

気持ちが落ち着き始めたら「痛かったね」「嫌だったね」と気持ちを受け止めてあげてください。

このとき決して「Aくん嫌だね」「Aくんがそんなことしたんだ」「どっちがいい、どっちが悪い」などのジャッジはしないということを意識してほしいのです。

そして、叩いたほうのAくんには、気持ちが落ち着いてきたところで、「叩くのはよくなかったね」「本当はどうしたかったの？」など、よくなかったことを伝えます。

自分よりもBちゃんをかばっていると思われないように気を付けながら、最後まで話を聞き、気落ちを受け止め、共感し、よくなかったことを伝えます。

すっきりしない様子のあるかもしれませんが、そうやって体験しながら落ち着いて考える力がついてきますよ。

